

池谷薫監督「蟻の兵隊」をめぐって

On “The Ants Soldier” by Ikeya Kaoru

本稿は、2019年6月15日（土）におこなった、埼玉大学創立70周年記念リベラルアーツ連続シンポジウム3「池谷薫監督『蟻の兵隊』をめぐって——人間を撮る 人間の尊厳 個人と戦争」の講演および討論を誌上にて掲載したものである。映画上映後、池谷薫監督の講演に続き、討論者として埼玉大学大学院人文社会科学研究所の一ノ瀬俊也教授と、小野寺史郎同研究科准教授が討論者としてコメントをおこない、質疑応答へと移った。司会は、牧陽一同研究科教授が担当した。主催は、埼玉大学教養学部／大学院人文社会科学研究所である。

池谷薫監督講演

奥村さんがこの映画を最初に見た感想から言いましょうか。完成試写会で奥村さんは一番前で、奥さんは一番後ろで見た。奥さん「執念ですね」。奥村さんは立ち上がる、ようやく絞り出すように「これも始まりの第一歩です」と言ったんですね。

どうやら、かわいくない爺さんだと思いましたよ。いちばん感想を聞きたいんだから。ところが

いいとも悪いとも言わない。その後、内部試写という、まあ評論家に見せたりする試写を続けるんですけど、6回くらい連続で来たんですよ。こういう試写は批評家に見せたりするのであんまり本人がいるというのはあまり都合がよくないんですけど、でも「見たい」って。で、6回目か7回目に、僕に「監督、これはいい映画だ」って。で、どうということかという、奥村さんは最初に来た時に、スクリーンに大写真になっている自分とそれを観ている自分のギャップを埋められなかった。つまり「蟻の兵隊」という映画は、奥村和一が奥村和一を演じきったんです。しかも山西残留兵士を。

この映画は、実は、僕狂って撮った映画なのね。そういう話をもうちょっと後でします。奥村さんと僕が最初にあったのは2004年なんですね。ということは翌年が終戦60年ということで、ずっと日中戦争についてはやりたいと思ってたんですけど、

最初は、奥村さんと逆の立場で中国に残留した人たち、つまり新中国の建設に協力した方々ですね、たとえばまあ、満鉄の技師さんとか医師や看護師さん、意外と知られていないのが中国の空軍の創設に協力したはやぶさ戦闘部隊ですね、そういう方々のことを調べていた。でも、ある人から「池谷、こういう話があつてな」といって一通の手紙を渡された。それが奥村さんからその方に宛てた手紙で「裁判の傍聴に来てほしい」ということだった。それを見てびっくりしてね、長年中国を舞台にドキュメンタリーを撮っていたけれど、まったく山西残留問題というものを知らなかった。そのとき、僕は申し訳ないと思った。知らないのは罪だと思った。なので、その場で奥村さんに会いたいと電話したんです。奥村さんは中野の江古田というところの、引揚者の寮のような、公団に住んでいましたけれども、その近くのファミレスで会ったら、奥村さんは軍隊式の敬礼で「奥村和一でございます」とおっしゃって、僕はそのときの姿を見て「これは主役の顔だ」と思ったね。映画が撮れると思った。もうひとつ、奥村さんは普段はほんとに好々爺ですよ。それがこの残留問題に突然怒り出す。映画の中でも怒ってましたよね。そのギャップが、映画を撮る側にとってはたまらなく魅力的だった。

一方の奥村さんは、映画を作りませんかと言われて「しめた」と思ったって。じつは僕が奥村さんに出会ってときは裁判の一審が終わっていたんです。こういう裁判は、だいたい一審で先が見えますから、ま、そもそも「裁く気のない裁判」なんです。なのでメディアも全然来ない。こんなすごい裁判なのにね。だから山西残留問題というのが結局誰にも知られずに歴史の闇に葬り去られようとしていた。そのときに僕が現れて映画を作らないかと言った。奥村さんはせめて映画としてこの事実を残したいと思ったから、「しめた」と思ったと言うんですね。

そして、まあすぐ撮影が始まったかというところではなくて、映画は金がかかるんです。この映画は全国の皆さんからカンパを募っていったんです。で、制作費の五分の一か六分の一くらいかな、5~600万くらいのお金を、浄財をいただいて。と同時に、毎週奥村さんと会って話を聞いていました。その中で僕らがどうしてもこの映画を撮らねばならないと思った瞬間がある。それが「初年兵教育」、肝試しという名で中国人を銃剣で刺殺した、殺人訓練の話ですね。奥村さんは僕に会う前に

2 度ばかり山西省に資料を探しに行っていましたから、ひょっとしてそういう現場にも行ったことあるの？と聞くと、さすがにないと言われるんですよ。僕はそのときに返す刀で「一緒に行きませんか」と言ったんです。わかってました。奥村さんにとってそれがどんなに辛いことか。でもやっぱり見たかった。撮りたかった。

日本にいて、語る元兵士はたくさんいますよ。でもね、自分が（人を）殺めた現場に行って、それを語る兵士というのは、僕は見た事なかった。だからやっぱり撮りたかった。「狂って撮った」という話をしましたね。いくつか理由があるんです。

一つは、やっぱり奥村和一の中でも静かな狂気があった。奥村さんは 60 才くらいまで山西残留問題とは離れて暮らしてきたけれども、その後仕事を辞めてからは自分の人生すべてを残留問題の究明にささげた人なんです。でも資料を集めるにしてもお金がかかるでしょ。そうすると奥さんの財布から金をかすめてたわけです。でもその奥さんには何ひとつ戦争のことは話していない。そういう静かな狂気があったんです。

二つ目、『蟻の兵隊』というのは、記憶と格闘する映画なんです。でも 60 年前の記憶でしょ。奥村さんが自分の都合のいいように勝手に演出されてた、たとえばあの殺人訓練、奥村さんはてっきり罪のない農民を殺したと自分は思っていたわけです。だけど実際は違いましたね。日本が管理する炭鉱の警備隊員だった。

でね、僕はまずいなと思っていたんです。奥村さんが自分の記憶を操作すると、裸の「人間・奥村和一」が撮れなくなるわけです。そして、そのころから僕が奥村さんに「それは違うでしょ」と言うようになるんです。奥村さんが言ったことに対して。だから最初はびっくりしたと思いますよ。奥村さんも「この若造はなに言ってるんだろう。俺が言ってることをなんで違うと言うんだろう」って。でも奥村さんってすごい人で、二、三日経って、「監督あれはこういう意味か」って聞いてくる。「そういうならば確かに自分の記憶が違っているのかもしれないもう一度ちゃんと向き合ってみる」と。

三つ目の理由。これは僕のすごくパーソナルな話なんですけれど、じつは僕は被爆二世なんです。親父は海軍の技術将校で、戦艦大和の大砲の弾とか作っていたんだけど、技術屋だから予備役に回れた。それで送られたのが広島で、うちの親父は爆心 1.4 km で浴びてるんです。一緒にいた 4 人のうち 3 人が死んでる。親父がなぜ生き残ったかという、ちょうど工場の寮で朝ごはんを食べているときにおばちゃんおかわりと言って窓に背中を向けたの。で、背中に浴びたから生き残ったんです。そして、その自分が被爆者であるということ、僕が被爆二世であることをずっと隠すんです。当時は被爆者への差別があったから。で、僕が 18 才になって立派に育ったなと思ったんでしょうね。ある日突然そのことを言われた。僕はそのときすごく思った。僕がもし何も知らないで、たとえば白血病かなにかで死んでいくとしたら、俺はどんな思いで死んでいくんだろうと思ったから。だから僕の中では、戦争に行った人たちに対して「御苦労さん」という思いもあるけれど、それよりも「もっと語ってくれ」という思いがあるんですよ。だから奥村さんは僕の親父の代わりをさせられてるみたいなのところもあってね。

四つ目。殺人現場を歩く、それは下手人（げしゅにん）と一緒に歩きたいところがあって、そうすると僕ら撮ってる側の人間も、どんどんささくれだってくるんですよ。荒んでいく。そういう感覚が僕を狂わせていったと思うんです。僕はあの旅で、奥村さんは死んでも本望だろう、くらいに思ってたからね。金子さんじゃないけど、ぞっとするけど、でもまあ、僕は常にこういう話を赤裸々に話すんです。ドキュメンタリーがどういう風にてきてるかを知ってもらいたいから。つまりあの映画は、僕が奥村和一にはげしく介在することによって出来上がっている映画なんです。

『蟻の兵隊』の核心は、奥村さんが中国に旅立つというところなんです。その理由は二つあります。一つは山西残留問題究明の資料を発見すること。残留問題について少し語ると、「裁く気ない裁判」と言いましたけれど、当初軍は15,000人、一個師団を残す気だった。で、まあ宮崎参謀がああいう風に言って軍司令官を叱責したりする中でどんどん数が減ってそれでも2,600人が残るはめになった。そのときに実に巧妙なアリバイ工作をやっている、たとえば奥村さんは全員現地除隊の扱いを受けているんです。記録上は軍籍を抜かれているんです。本人まったく知らないんですよ。

奥村さんは昭和29年に舞鶴に引き揚げて、新潟の人だから新潟県庁で自分の軍籍を確認しに行った。軍籍がない。そういう風なことを周到にやっているんですね。ついでに言うと奥村さんは商人の家の長男で、その長男が行方不明になっているわけだから奥村さんの妹さんが婿をとって家を継いだんです。そこに奥村さんが帰ってきた。ところが今度は「中共帰り、赤のスパイだ」と言って毎日公安警察が張り付くんです。奥村さんは居られなくなって東京に出てくるんです。

なぜ、残留兵たちはもっと早く動かなかったんだと思うでしょう。いま言ったように「暮らしていくのが大変だった」んです。「赤のスパイ」と呼ばれていたんですから。本人たちは祖国復興のために命をかけた、なのに帰ってきたら「お前は日本の兵隊じゃない、逃亡兵だ」という扱いを受けたわけですから、どれだけ悔しかったか。

ただ、この「蟻の兵隊」という映画は2時間をきる映画でね、山西残留問題この複雑な問題を語りつくすのは無理だと思ったわけ。映画は奥村和一の執念を描くということで、作りきりました。翌年にこの『蟻の兵隊 日本兵2600人山西省残留の真相』を新潮社から出しました。これはまったく映画とは切り離して残留問題の真相について各種資料をもとに作ったんです。奥村さんは僕と出会って翌週に段ボール箱3箱分の資料を送りつけてきたの。この爺さん本気だなと思ってね、これは逃れられなくなるんじゃないかと、ただ、その資料じゃ映画は作れないんです。資料で映画を作る人もいるけれど、ただ僕は人間を撮るという撮り方ですから、ただ奥村さんが集めた資料をむげにするわけにはいかないので、この本を出しました。

『蟻の兵隊』というタイトルも、どうしてつけたかと皆さん思うと思うんですけど、奥村さんたちはいきなり裁判をやったのではないんですよ。国会や政府に請願や陳情を繰り返した。そのときにそれぞれがどんな理由で残留を命じられたのかどのように命じられたのか、その手記を寄せ集めて文集を出した。そのタイトルが『蟻の兵隊』なんです。僕はそれを拝借したんです。つまり我々は蟻のようにただ黙々と上官の命令に従って戦争を続けた、という意味です。これは最初、蟻とい

う漢字が難しいからカタカナにしていた。するとモハメド・アリじゃないけど中東の戦争に間違えられるってことになって、漢字にしたの。「蟻」は虫へんに義侠の義と書くんですね。まさに奥村さんたちにふさわしいタイトルだなあと思っています。

理由の二つ目。それは己の戦争に落とし前をつけるということだったんです。その最たるものが、あの初年兵教育の殺人訓練の現場を再考するをいうことだった。奥村さんが震えるような声で持参した杖を銃剣に見立てて、自分がここで何をやったのかやらされたのかを語っていく。日本から持ってきた線香を手向けて手を合わせて。ところが、その奥村さんが日本兵に戻っちゃいましたね。おそらく「蟻の兵隊」の中ではいちばん衝撃的なシーンだと思う、奥村さんは自分が殺めたのは罪のない農民だと思い込んでた、ところが真相を知る人が現れて日本軍が管理する炭鉱の警備隊員だったと、その人たちが共産軍に襲われてろくに戦いもせず武器を置いた、「ならば敵前逃亡ではないか」。奥村さん、あるとき憲兵になってしまったんですね。

ただ、あのインタビューは僕ではなくカメラマンが聞いているんです。なぜかという、その時日本人通訳の大谷というのがいて、それが、僕が奥村さんを追い込んでいくのを許せなくなったの。で、あのシーンの裏側で僕は取っ組み合いの喧嘩をやってるの。首、絞められてるの。でもカメラマンはすごいね、そういうときに、あれは聞かなければいけない話なんですよ。あそこで奥村さんは、はじめて自分が日本兵に戻っていたということに気づくんですね。あれだけ戦争を憎んで反対をしていた人が、まだ日本軍の亡霊のようなものが自分の中にひそんでいる。それを気づかされたわけだから本当に苦しうだった。

ただそのことによって僕はすごく大事なことを教えてもらった。それは戦争というものは一度行ったら死ぬまで話してくれないということです。もうひとつは、戦争とういのは、人を殺すということなんです。殺したという記憶から兵隊は逃れられないんです。だから、今日若い人がたくさんいるけれども、戦争に行くとは、一生戦争と付き合う覚悟があるかと聞きたい。スタジオジブリの高畑勲監督、去年なくなってしまったけれど、あの人にかわいがってもらったけれど、あの人はいつもこう言っていた。『火垂るの墓』はじつは戦争の抑止力にはなりません。それはああいう映画を見たらこういう風にならないように二度と戦争に負けない国にするためにはどうしたらいいかと考えてしまうから、やはり、加害を描かないとだめだ」と。加害を描かないと本当の戦争の過酷さはわからないんです。

奥村さんという人は山西残留兵士というのは国から捨てられた人、被害者なんです。ところがそうやってあの戦争と向き合えば向き合うほど自分が加害者であったことから逃げられなくなる。奥村さんはそのことに居心地の悪さみたいなものを感じていた。僕がああ殺人訓練の現場に行こうと言ったとき、奥村さんは「いかなければならないところだと思ってる」と言ってくれたんです。戦争被害と加害、その両面から描くことができたのは、その奥村さんのひと言から始まったんだなあとも思います。

日本兵に戻ってしまった奥村さんにとって、あのシーンは映画にとってものすごく重要だった。あれ以降、奥村さんは残留問題以外のあらゆる問題についてどんどん関心を高めていくでしょ。その一人が劉面煥（リウ・メンカン）さんという、日本から性暴力の被害を受けた女性です。今日皆

さんにわかって帰って行ってほしいのは、リウ・メンカンさんは慰安婦ではないです。日本政府相手に裁判を起こしていただけれども、そのときは「性暴力の被害」という言葉を使っています。慰安婦というのは自分にとってどれだけ辛い話か、それを認めたくはないんですよ。最近はどこかの馬鹿が「慰安婦なんていなかった」という話をする。それどころじゃないんですよ。慰安所というのは都市にしかない、日本軍というのは点でしか抑えてないんですから、そういう都市には慰安所があった。慰安婦がいた。でもこんな山奥の軍の駐屯時には慰安所も開設されないから、麓の村から女性をかつさらってきて軟禁して、ということだったんです。

このリウ・メンカンさん、撮影の2日前まで入院されていたの。僕は、撮影は絶対無理だと思っていた。でもリウさんは「行きます。それが私の使命です」とおっしゃった。きれいなおばあちゃんですよ。だからよけいに狙われた。その人がほんとに淡々とすさまじい被害を語っている。最後に奥村さんを許すというか、「奥さんにお話しすればいいのに。今のあなたは悪人には見えません」と言ってくれた。奥村さんはリウさんが観音様に見えたと言いましたよ。でもやっぱり、あの過酷な記憶と向き合う二人の人間が対峙しているということなんだと思うんですね。

そうして奥村さんの山西省の旅は終わるけど戦争を巡る旅は終わらない。最後、終戦60年目の8月15日の靖国神社に行ったんです。順番がひっくり返ってますけれど、それでクランクアップしてるんです。あの日。僕らは靖国劇場って呼んでますけれどね。コスプレで。あれが1日中8月15

日は続くんです。興味があつたら今年の8月15日行ってみてもらいたいと思う。いつも思うんだけど、あれはどこで着替えてんだらうね。家からあの恰好で出てくるのはちょっと勇気がいるなと思うけど。まあ、そこで奥村さんが激しく向き合うのが小野田寛郎さんですね。みなさんびっくりしたと思うけど、小野田さんのあの表情見た事ないでしょ。小野田さんは国民的英雄ですからね。ただ、小野田さんは陸軍中野学校を出た人ですからね。確信的に残留をしていた。それから部下を二人残して、その二人は死んでますよね。

小野田さんは、晩年は靖国の広告塔みたいな役割をしていたんです。まあ言ってみれば二人とも残留兵ですから、小野田さんが何と言ったのか聞き取りづらかったかもしれないけど、奥村さんが「侵略戦争美化ですか」と言ったのに対して、小野田さんは「美化じゃありませんよ、正当化しているだけです。なぜ開戦の詔書を読まないのか」と。開戦の詔書とは、天皇が、アジアの安定平和を守るために自衛のための戦争を欧米に対してするのだ、と宣言した詔書ですからね。要するに経済的にも包囲網を築かれてどんどん追い込まれていった日本が自衛のために戦争を起こすのだと。小野田さんは、あれは侵略戦争ではない、自衛のための戦争だと思っているわけです。

僕はこのシーンでどちらがいいとか悪いとかいうつもりないですよ。だけどあのシーンは、とてつもなく痛いでしょ。突き刺さってくるでしょ。それは何かと言ったら、同じ地獄を見た兵士が、60年間の日本の民主主義という中で、あの戦争については全く逆の立場で向き合わざるを得ない、つまりあの戦争を日本はなにも検証していない。そのことを突きつけられる痛みなんです。

それとも一つは、あの日本の戦争を、この爺さんたちに押し付けていいのかと、下の世代が、もっとあの戦争は何だったのかという関心を持ち続けなければならないのではないかということ突きつけているんです。

『蟻の兵隊』は2006年に公開して、ものすごく（観客が）入ったんです。渋谷のイメージフォーラムという映画館で封切しまして、そこの1階と地下にあるスクリーンを両方開けて1日8回上映をやった。それでも立ち見が出るくらいで、それが11週続いた。それにはいくつか要因がある。その年は小泉さんが靖国を公式参拝したんです。それで国じゅうがああ戦争は何だったのかという議論があちこちで交わされるときだったんです。そういうときに『蟻の兵隊』は世に出たんです。

話はそろそろにしますけれど、(終わりに)一つ、普段の奥村さんはどういう人か。若いお姉ちゃんが大好きで。映画の頭でいきなり焼きそば食べているお姉ちゃんのところに寄って行くでしょ。必ず行く。100%行く。僕らはそういうところよく知ってるの。でもあそこで、あの子たちがとんちんかんな事を言ってくれたおかげで、僕は「ここ勝負だ」と思って語っている。山西残留問題はものすごく複雑なわけだから、もし字幕にしたらいっぱい文字を使わなければわからないような問題だから、それを「このお爺ちゃんすごい人でね」と一気にあそこで勝負かけて言ってるよね。あれでずいぶんやさしくなったかなあ、と。でもあのシーンを見てると、なんか若者たちをバカにしていると見るんだって。でも違うんだ。あの子たちは一生懸命聞いてくれたじゃない。最後は「ひどいですね」と言ってくれた。若者たちにはちゃんと触れてあげる、教えてあげることが大事なんだと思います。奥村さんはいつも言っていた。「戦争は決して他人事でも、遠くの話でもない」と。「家

族には家族の戦争がある。だから勇気をもっておじいちゃんおばあちゃんに聞いてごらん。そうすれば戦争とはなにか必ずわかりますよ」と言っていた。

奥村さんは2011年5月25日に亡くなったんですけど、僕はその年、東日本大震災があつて、陸前高田で佐藤直志という木こりのお爺ちゃんを撮っていたんです。この人は、津波で消防団員の息子をなくして2階まで家が水に浸かってしまったんだけど、でも自分は木こりだから森に行って木を切って、もとの浸水地域に家を建て直す。そういう映画を撮ったんです。「先祖になる」という映画。僕は2作続けて頑固老人を撮ったんです。頑固老人を撮ったら日本一と言われたんです。

その陸前高田で佐藤直志という人を撮っているときに、奥村さんが危篤だと聞くんです。ロケを終えて中野の病院にまっすぐ行ったら、奥村さんは全身を管でつながれていて、そこで僕に何と言ったと思います？「陸前高田はどうですか」。最期までそういう人だった。信念を持って生きる男の生き様というかな、それを見てほしくてこの映画を作ったんだと思うんですね。

それともう一つ『蟻の兵隊』が言っていることは、「国家はでっかい嘘をつく」ということです。つくなど言ってもつくんです。だからそこに対して我々が無関心でいてはいけないと思う。ただこういう映画は右から左まで見なきゃとだめだと思ってる。だから、いちばん最初に右翼に見せました。その右翼が言った。「堂々とやってくれ。この映画がだめなら日本がお終まいだ。何かあったら私動きますから」と言ってくれて。でもそう。反戦集会ばかりやったって意味ないのだから。右の人も老若男女もみんな見て、戦争とは何だったのかと知ることがまず最初にあるべきだと僕は思っている。劇場公開にこだわるのもそういう意味。劇場というのはいろいろな人がくるから。これからお話をいろいろな先生とできるのをうれしく思ってます、僕のほうからは。

コメント

コメント①： 一ノ瀬俊也

日本近現代史の方から感想を申し述べます。

今日は中国の話でしたが、先の戦争全体でどれくらいの数の残留日本兵がいたのかについては、林英一さんの『残留日本兵』という本があります。

先ほどの池谷先生のお話にも、小野田さんや横井さんのお名前がありました。グアム島やルパン島といったところで、30年ほどのジャングル生活を終えて1970年代に帰国された方が有名ですが、残留日本兵は総数では1万人前後が中国からインドネシアなどの東南アジア全域に存在したと推計されています。今日の『蟻の兵隊』については、兵士たちが残った理由は上官の命令であったとされています。上官は戦犯追及を免れようとして取引の材料に奥村さんたちを使ったわけですが、他の地域の兵士が残留した理由は、上官の命令、戦犯追及を免れようとした、軍隊がいやになった、あるいは現地の独立運動に加わろうとした、などの複合的な理由があるので、なかなか一般化は難しいようです。

残留日本兵は、『蟻の兵隊』の中国がいちばん多かったとされます。全部で5,600人、うち共産党側は3,000人、国民党側は2,600人といわれております。今日の映画『蟻の兵隊』と、先ほどご紹介いただきましたご本は、私も拝読しまして大変感銘を受けました。2,600人もの人が中国に残留したという知識はあったのですが、彼らが残らざるをえなかった経緯と、その理不尽さをあらためて勉強させていただきました。

次に、私が印象に残った映画の場面を述べます。一つは映画の中盤の最初の方あたりです。奥村さんが中国の山西省の档案館、日本でいう文書館へ行きます。そこで、暫編独立第十総隊の「総隊部服務規程」という当時の文書を閲覧する場面がありました。総隊長の今村方策が「総隊長訓」というのを残し、その中のある個所を奥村さんが指さしていました。「総隊ハ皇国ヲ復興シ天業ヲ恢弘スルヲ本業トス」という言葉のある一文です。

この言葉こそが、池谷先生のご本にいう「残留部隊の建軍の本義」、つまり部隊が何を目的としているのかを端的に示すものです。このなかの「天業ヲ恢弘」という言葉の意味を、当時戦時中に出版した『皇国の肇』という本より現代語訳しますと、「豊葦原瑞徳国を立派に治めることができ、広く世界中に徳を及ぼす事ができる」という意味です。天皇の仕事を押し広めるとは、「世界に天皇の徳を広める」という意味です。

この「天業恢弘」と類似した有名な言葉に「八紘一宇」という言葉がございます。最近も国会議員が使って問題になりました。これは「あめのしたをおおいていえとせむ」、つまり天皇の権威、光の下に全世界を統一するという意味があります。もとは日本神話に出てくる言葉です。「天業恢弘」は「八紘一宇」とともに、日本の大東亜共栄圏の建設や侵略戦争を正当化する、イデオロギーとして使われていた言葉です。この戦争は天皇を中心にアジアを統一して、共に栄えるための正義の事業であるから、国民あるいは兵士は天皇のために戦わねばならない、という意味で使われた言葉です。

問題は、なぜそのような言葉が、残留部隊の「建軍の本義」として使われていたのかです。私は二つの可能性があると思います。

一つは、日本が復興を遂げた暁には、再度、大東亜共栄圏みたいなものを目指そうと今村たちが本気で考えていた可能性です。この場合、敗けた戦争への反省というものがまったくなかった、ということになります。

もう一つは、この「天業を恢弘する」というのは、イデオロギー性を持った言葉、論理というよりは、ある種の殺し文句、それが持ち出されれば厳しい軍隊教育を受けた兵士たちは自動的に服従してしまうような文句として「総隊長訓」に登場するのかもしれないと思います。この場合「天業恢弘」という言葉自体には、とくに意味はないわけです。もしこちらだとすれば、この言葉は、先の戦争がどれだけ空虚な、空疎なイデオロギーのもとで遂行されていたのかということを書き添えるように私は思いました。

二つ目の印象に残った場面は、映画終盤の靖国神社における奥村さんと小野田さんのやりとりです。小野田さんがルバング島から帰ってきたのが1974年で、映画ではそれから31年近いと言っていましたので2005年、終戦60周年の出来事だと思います。

奥村さんが、演説を終えた小野田さんに「侵略戦争美化ですか？」と声を上げます。これに対して小野田さんは、ちょっと聞き取りづらいのですが、「開戦の詔書をもういっぺん読み直さなきゃいかん」と応じます。

二人は、同じ残留日本兵ながら、鋭い対比をなしています。この場面は、いろいろな人の印象に残ったようで、さきほど引用しました『残留日本兵』という本には、こう書いてあります。「同じ残留日本兵といっても一方は英雄視され、一方は棄民視されてきたことが見事に映し出されていた」。

ただ、この見方に対しては、私は若干どうかと思います。じつは二人は英雄と棄民ではなくて、どちらも棄民、つまり国や社会から棄てられた人だと思っています。なぜ小野田さんは「棄民」なのか。小野田さんのいう「開戦の詔書」には日本の戦争目的が書いてあります。これは小野田さんにとって、先の戦争は何だったのかという問題と直接つながります。奥村さんのいう「侵略戦争」でないなら何と書いてあるのか。先ほど池谷先生からもお話がありましたが、「自存自衛」ですね。日本の戦争の目的は、大東亜共栄圏の建設とかいろいろありましたが、それらは開戦の詔書ではオミットされて、「自存自衛」一本に絞られている。米英が日本を経済制裁で締め上げてくるから、日本としては自衛のために決然と立ち上がるしかないのだという考え方が、天皇の言葉として示されているわけです。

なぜ「開戦の詔書」では、そういう言葉が使われているのか。これは歴史的な背景を考える必要があります。第一次大戦後の国際法では侵略戦争は違法とされ、唯一許されていたのが自衛の戦争でした。大東亜共栄圏の建設というのは、国際的に見ると、侵略戦争という批判を受ける可能性があった。そのため「開戦の詔書」では大東亜共栄圏を外して、「自存自衛」一本に絞ったとの説があります。おそらくそうなのだろうと思います。国内向けに戦争を正当化する理由と、国際的なそれがちょっと違っていました。

このように、小野田さんにとっての太平洋戦争は、あくまでも自衛戦争であり、ゆえに侵略戦争ではないのです。では、戦後の日本社会において、小野田さんのような自衛戦争論は主流であったのかというと、必ずしもそうではありません。そのような理屈は国際的にはもちろんのこと、国内的にも通用が難しい。

というのは、戦後日本は、戦争指導者たちを侵略戦争の罪で裁いた東京裁判を受諾することで国際社会への復帰を果たし、経済成長を謳歌してきたからです。そういう中で、自衛戦争論は、侵略戦争論も同じなのですが、なかなか日本社会の主流にはなれない。吉田裕さんの『日本人の戦争観』という本があります。戦後50年の段階で調査してみると、侵略戦争論に多くの人が賛同したわけではないのですが、さりとして自衛戦争論に賛同する人もそう多くはない。小野田さんが「自衛戦争」の英雄でいられたのは、あくまでも靖国神社という特異な空間の中ではなかったかと思います。

小野田さんは1974年に日本に帰ってきて半年でブラジルに移住します。一般的には戦後日本に馴染めなかったからといわれていますが、馴染めなかった理由は、当時の日本の国や社会が、小野田さんのいう自衛戦争論をけっして認めようとはしなかったからではないでしょうか。そうすると小野田さんという人も、実は戦後日本から棄民されてしまった人ではないのか、という感想を持ちました。

私としては大変勉強させてもらった映画とご本でした。一人ひとりの兵隊にとって、あの戦争というものがなんだったのか、戦争を支えたイデオロギーというのがいかに空疎であったのか、そういうことについて深く考えさせられた映画でした。ありがとうございました。

コメント②： 小野寺史郎

埼玉大学教養学部の小野寺と申します。専門は中国の近現代史を勉強しております。一ノ瀬先生も私も、歴史学という学問的な方向から中国や日本に関わっているわけですので、池谷監督のような映画を通じた関わり方とはまた違った議論をすることになるのではないかと思います。

一つは、この映画を拝見して、もう一つは、先ほど紹介された本の方を拝見して、私の方で理解するためのメモのようなものをレジュメにまとめましたので、見ながらお話を聞いていただきたいと思います。

1944年11月は奥村さんが山西へ送られた日です。映画中盤にありました寧武という場所で初年兵教育を受けたのがこのときです。その後、日本が敗戦し、閻錫山と澄田の間で残留工作が開始されまして、2,600人が暫編独立第十総隊となります。1948年になりまして、最終的に1,200人の方が残っていたんですけども、晋中作戦という名前になりますが、中国共産党の人民解放軍が、山西に攻撃をする。そこで閻錫山の軍隊と第十総隊が、映画の中で最初に奥村さんが行った場所の南庄村で包囲されて戦死者150人を出し、奥村さんは捕虜になります。その後、さらに太原という山西省の首都に向かって解放軍が進んでいく。その際に太原の近辺にあったのが牛駝寨という要塞で、映画の中で小高いところにあった、レンガ造りの建物です。そこが陥落し、100名以上の方が亡くなり50名以上が捕虜になった、その直後に太原が陥落するということになります。そして6年間の抑留を終えて奥村さんが帰ってこられたのが1954年になります。

一つ補足をさせていただきますと、奥村さんが坦白(タンバイ)書という言い方とされていたと思いますけれども、中国の公文書館になぜ日本語で書かれた日本兵の記録が残っていたのか、ということです。これは当時の中国の戦犯管理所が太原や撫順(ぶじゅん)にありまして、捕虜となった方たちがそこで残したものです。「坦白」とは、自白をする、白状するという意味ですけども、当時の中国共産党は捕虜政策として、指定文献の学習や討論を通じて自らの戦争犯罪を語らせて、文書化するというをおこなっていました。この辺に関しては参考文献にあげました、大澤武司さんの『毛沢東の対日戦犯裁判』(中央公論新社、2016年)というすばらしい研究があります。大澤さんは埼玉大学に在学されていたという縁がある方ですので、本当は大澤さんに話していただいた方が大変いいのではないかなと思うんですけども、代わりに紹介をさせていただきました。その上で、私が映画を拝見して、一ノ瀬先生とはまた違った形なんですけれども、印象に残った点は二点です。

一つは私もこの映画を撮られた前年くらいですね、2002年から2003年に中国におりまして、南京の公文書館であのようなファイルを繰って史料を見ておりました。今となってみればもったやんと勉強しておけばよかったなと思うわけなんですけれども、それに関係する理由がありまして、やはりこの映画というのは、すごくいいタイミングで撮られたというのがあります。この辺は池谷

監督の方がよくご存じなのではないかと思いますが、2000年代は中国でかなり史料の公開が盛んにおこなわれておりまして、たとえば1949年頃の史料を日本人が訪ねて来ても見せてもらえたわけです。それは素晴らしいことだと思います。ただ、その後は史料公開がかなり厳しくなっておりまして、おそらく今行ったらああいう画は撮りにくかったのではないかなと思います。そういう意味で、こういう映画はやはり撮られるべき時に撮られたのだなということを感じました。

もう一つは、これは池谷監督も言われたんですけれども、寧武における初年兵教育のところなんです。特に私が思いましたのは、奥村さんの言った「人間性、理性のはく奪」の問題です。奥村さんが次第に日本兵の振る舞いをしていく。それに対して、炭鉱の警備隊の中国人、たしか54人の方が殺されて1人だけ逃れた、その息子の方、孫の方がいらして話を聞いていたわけなんですけれども、奥村さんが非常にこう、問い詰めるのに対して、茫然としている、それがすごく印象に残っている。こういう言い方はおかしいんですけれども、共産党軍の方が強く、そして守っているほうが劣勢である、そういう状況で武器を捨てるというのは、たぶん人間としては自然な行動なんです。そしておそらくは、それをしないようにさせるのが軍隊というものなのだろうな、ということを感じました。死守するということですね。ですので、日本の軍隊教育というのが悪い意味ですごくよくできていて、人間を兵士にしていく、ということです。逆に中国ではそういう意味ではうまくいかなかったというんですけれども、逆に人間性が残っているという言い方もできるのではないかと、そう言うことを、シーンを見ながら痛感した次第です。

以上、簡単になりますけれども私からはここで終わらせていただきます。



討論

司会： 牧陽一

では、今のお話について、会場からご意見や質問がございましたら。

僕はこういう企画したんですけれども、最初に池谷監督の作品に出会ったのが2002年の「延安の娘」なんです。僕も中国のことを研究してたので、観に行ったら素晴らしい作品だなと思って、しばらくはいい作品を作り続けていらっしゃるなと思っていたのでなかなか近づくチャンスがなかったんですけれども、去年立教大学で『蟻の兵隊』の上映と講演がありまして、見に行ったら素晴らしいなと思って、これはぜひ埼玉大学の学生の皆さんや関係者の皆さんに聞いてほしいなと思って企画したんですね。池谷監督と私は大体同じくらいで、僕は一つ下なんですけれども、僕らの世代は、やはり池谷監督も原爆の被爆二世だし、まあ私は体自体は何も被害はないんですけれども、やはり、おじが二人死んでいる。二人とも不思議な死に方をしていまして、海軍で船に乗っているわけですが、出航する前に港から死体で発見されました。もう一人は潜水艦に乗っているんだけど、亡くなっていて、その同じ乗っていた同僚はまだ生きています。という不思議な。だからどうも、なんていうんですかね、撃ち合いして殺し合いして死んだというのはほとんどなくて、だいたい内部でリンチを受けたりひどい目に遭っている人と、あとは餓死、飢えて死んだ人がかなり多いと聞いています。そういうことで本当の実態とはほど遠いことがあると思うんですね。

それと、私は家がすごく貧乏で母子家庭だったものですから母親が働きに出ていて親がいないので、おばあさんに育てられて、その息子が二人死んでいる。そのおばあさんが、家に勝手に「英霊の家」という札を貼っている。おばあさんとしては子供が二人死んだことをどうしても納得がいかないわけですね。で、いっぱい胸に勲章をしていたら天皇陛下が会ってくださるとか言ってました。やはりちょっと、どうしても納得がいかないからそういうところへ向かっちゃうんだなあ。でも僕はそれがどうしても変だから、「あれは犬死だ」とか言ってやったことがあって、あとでずっと後悔はしてるんですけれど。でも事実そうなんじゃないか。でもそういう風なことを信じられないという人がすごく悲しいなと思って、ずっと日々過ごしていました。

ちょっとくだらない私の話なんですけれども、それで私は大学に行くのにお金がないし、どうしようと、そうしたらおばあさんが恩給というんですか、戦争で亡くなった子供のお金を出してくれました。それから中国に行きたいと言ったらお金を出して、みんなそこからお金を出してもらって。奥村さんたちもたぶんそうやって裁判に勝って兵隊としての手当をもらったら、たぶん孫やなにかに勉強しろって言って学費を出したと思いますね。そして僕も中国へ行った。だから、あの、これは決着をつける、奥村さんは決着をつけたと思いますけど、まあ、僕らの世代はこれからもうちょっと頑張っただけじゃなければいけないなと思っています。そしてどうしてもこの映画を観てもらって考えてもらいたいなと思って企画しました。

いかがでしょうか。

質問者

奥村さんが靖国の前で「参拝しないんですか」と聞かれて「侵略で死んだ者が神になれるわけない」とおっしゃった。これはちょっとまあ、あらたな言い方と思ったんですけども、彼らはみな死ぬ前に靖国で会おうと言って、靖国というのは彼らの中で神聖なものかと思っていたんですけども、やはりその辺り、あの人たちにとってみれば靖国というのは別の見方があるのかなというのがあります。

もう一つ、一ノ瀬先生のレジュメで「自衛戦争論は（侵略戦争論とともに）主流にはなれなかった」と書いてあるんですけども、自衛でもない侵略でもないとなると、では主流は何だったのかなという点です。その二点でございます。

池谷監督

実は、奥村さんはね、早稲田の専門部に行くような、まあちょっとインテリだったんですね。で、だからそのときの教授の先生の中には「この戦争は敗ける」とはっきり言っていた人がいたと、言っていましたね。だけれども死にに行くのだと。だから、水行をしたと言っていました。滝に打たれたと言っていました。奥村さんのような人でもね。だからしっかりと分析している兵隊も中にはいるわけで、そういう人たちはなにもそんなに靖国を盲信してるという人はいない、とも思う。

ただ、すごく重要なのは、奥村さんの場合は帰ってきた祖国日本の仕打ちなんですよ。大きいのは、奥村さんはね、捕虜になって、当然思想教育を受けるんですけども、思想改造教育というのをね、僕が最初に会った時に、奥村さんは「人間、思想教育では変わりません」と言っていた。今まで天皇制でずっと来たのに、いきなり毛沢東思想がどうのこうの、そんなのは耳に入るわけがないと。帰りの引き上げ船の中で奥村さんは、「どうやったら天皇制社会主義という国家ができるか」と思っていたというわけ。でも、それはヒットラーみたいだからやばいのでは、と俺言ったけどね。けれど、そういう人だったですね。

ところが、引き揚げてきた日本で軍籍を抹消されるだとか、もう、だまされる行為の連続みたいなときにね。そして、いつか奥村さんはすごく中国に傾斜してたんですよ。僕が会った時に、どう言ったらいいかな、奥村さんはね、立派な社会主義者だったね。俺はそれが気に食わなかった。すごく。で、奥村さんに「この映画をイデオロギーの映画にするつもりか」と何度かぶつかりましたよ。だから、僕は右か左かと言われたらどっちかと言ったら左だと思うけど、だけれどやっぱり映画自体がイデオロギーに染まっていくのは嫌だった。奥村さんとは最初のころは衝突したけれどね。やっぱり奥村さんすごくそこから考えてくれた。

で、「中国もやっぱり悪いことは悪いんですね」と最後はちゃんと言っていましたよ。とくに天安門事件のこととかね。あとはチベット問題にも奥村さんは関心持ってくれて。だったんですね。だから、靖国に関してはやっぱり兵隊にしてもいろんな思いを持っている方がいるんじゃないでしょうか。それからあとは台湾の軍属だった韓国人だとかね、方々の遺族の中では靖国に勝手に祀られているわけですから、「靖国から出してくれ」といってそういう訴訟を起こされてますよね。そういう事実もあるということだと思います。

一ノ瀬

私のプリントに「自衛戦争論は（侵略戦争論とともに）主流にはなれなかった」と書きました。先ほど池谷先生から、戦後日本というのは、あの戦争が何だったのかについてきちんと考察をしてこなかったというお話がありましたが、私も同じことを思いました。要は戦争についての総括がないということです。侵略戦争だったのか自衛戦争論だったのかをきちんと総括することがないまま、ここまで来ているということを示し上げたかったのです。

質問者

今日はありがとうございます。私が聞きたいのは軍司令官の話なんです。その命令を出した人が名前を変えて日本に来たと、いうことで、その後どういう人生を送ったのかということを知ることがあったら教えていただきたい。

池谷監督

澄田暎四郎（すみた・らいしろう）さんは、日本に帰って驚くことをやるんです。それは岡村寧次なんかと一緒にやっていくんですけど、「白団（パイダン）」、要するに日本の軍人の将校クラスを台湾に密航させるんです。そのセレクションを澄田さんはやっていた。要は、台湾をもう一回大陸侵攻させようとしたわけです。この、悔しいんだけどね、澄田さんは『私のあしあと』という自伝を書いている。僕は、本の中ではこれをずいぶん引用しましたがけれども。でね、澄田さんの息子っていうのは日銀総裁をやったあの澄田ね。プラザ合意で大変なことになったバブルを崩壊させたあれですよ、『私のあしあと』というのはね、日銀の印刷所かなんかで刷ってる。これがほんと腹立つの。とにかく人ごと。「残留兵は気の毒な存在だった」みたいな書き方をしている。だから、まあ、なんだろうな、ちょっと読んでほしいくらいですね。『私のあしあと』は。

一ノ瀬

私も『私のあしあと』は読みました。あまり悪く言いたくないですけど、ひどい本といわざるをえません。自分がいかに偉かったとか、どこかの会社の会長になったとか、恩給がいくらだったとか、本来なら自分ぐらいの軍人であればもっといい暮らしができたはずなのに、戦争で敗けてめちゃくちゃになったとか、そういうことばかり書いてあります。

池谷監督

この人（澄田さん）はフランス通だったんですよ。だから日本軍が南部仏印進駐していったそのときの指揮官なんですね。だからその容疑なんかでも戦犯の容疑かけられているんですね。

質問者

素晴らしい映画とコメントありがとうございました。先ほど、小野田さんと靖国神社での奥村さ

んの話で、戦争はなんだったのかというところの食い違いみたいなのところの、たとえば小野田さんは対米戦争のフィリピン、奥村さんは中国戦線、戦争の場とか、中国の戦争も自衛のための戦争だと天皇の詔書にあったかどうか分からないですけど、その辺のところとか、だいたい大正生まれの人が戦場に行っている、明治生まれの人が戦争に行かせている、という立場になると思うんですけども、その世代間とか、生かされた場所などによっていろんな見方が出てくる。そういうのが戦後日本人の戦争観の亀裂みたいのものを生んでいる、社会が分断されている、そういう分断が大変だからなんとかあいまいにしているというような、わかりませんけれどもその辺の関係もあるのかなという風にお話を聞きながら考えました。

池谷監督

ありますよね。残留裁判というのは、これはすごく残念だったのは、残留兵たちが一枚岩になれなかったんですよ。それは何かというと、捕虜になったかならなかつたで全然違うわけ。捕虜にならずに帰ってこれた人もいるんですね。何回か引き上げ船が出たんですよ。奥村さんなんか、その存在すら知らないの。だから、そこの違いというのもすごくあるんだけど、捕虜にならずに昭和23年とかに日本に帰ってこれた人は、亡くなったあの残留兵550人の戦死者を靖国に入れるべきだと言う。ところが捕虜になって思想改造教育を受ける、特に戦犯管理所に入れられたね、金子さんや村山さんもそうだけどああいう将校たちというのは、そこで坦白書を書くなりそういうことをして、帰ってきてからは中帰連というのを作るんですね。今は「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」という風になっているけれども、どちらかというとなら中国共産党の側の思想を持ってきた人たちなんですよ。中には共産党員の方もいる。共産党は軍人恩給そのものを認めていないんです。だから奥村さんの裁判では争点を軍人恩給にしちゃったのね。だから一枚岩になれなかつたわけです。だから国賠訴訟ってね、たとえば「戦後も戦争を続けさせられた苦痛」とか、そういう理由でもう一回やるかと言ったんですよ。奥村さんと。だけどまあ戦場の違いはあるけれど、引き揚げてきたときの違いもあるんじゃないですかね。ちなみに奥村さんたちがいた山西省は三光作戦をやったところですからね、焼き尽くす奪い尽くす殺し尽くす、をやったところなんで。すごく、それについて話があるのが、その戦線に送られた兵隊たちが沖縄に送られるんです。だから中国人に対する差別を沖縄に持ち込んでるんです。それがあの沖縄の悲劇を生んでいたというのも一つあるんですね。この中で「二つの戦争」というのを書かれている、その方の証言などはなかなかすごいですよ。

あと話変わりますが、奥村さんがあんなおばあちゃんたちと交流を持ったというのは、あの方たちの裁判の傍聴に行ったというのもあるんだけど、奥村さんは本当に質素な暮らしをしているんだけど、中国に行くときは50万円くらい持っていく。で、ああいうおばあちゃんたちはみんな身体を壊しているんです。そうすると、基金のようなものとしてこちらに10万、こっちに10万と、渡してるんですよ。そういう中からああいう交流が生まれたということも。さっき言い忘れたので。

一ノ瀬

ちょっと補足します。当時の日本にとって中国相手の戦争も自衛戦争だったのか、というご質問

だったと思います。当時の日本の理屈としては、対中国戦争は自衛戦争ではありません。というのは、日本は中国に親日政権をつくるからです。1940年に汪兆銘政権という日本の傀儡政権を立ち上げ、中国の正統な政権として和平を結び、同盟も結ぶ。もちろん蒋介石政権が別にあるのですが、当時の日本にとって、蒋介石政権は重慶の一地方政権に過ぎない。つまり、日本と中国の戦いは国と国との正式な戦争ではなく、建前上は討伐戦に過ぎません。一方、米英、そして蘭は経済制裁で日本を締め上げてくる、だからそこと戦うのは自衛だという理屈です。あくまでも当時の理屈ですが。

池谷監督

いま一ノ瀬先生先生がおっしゃったのが、開戦の詔書に書かれてあることです。天皇がそういう風に言ったんですね。

小野寺

ちょっと補足します。日本は中国に対しては宣戦布告していない、という有名な話がありまして、汪兆銘政権の方を正当な中国の政権とみなして重慶政権は公式には戦争の対象とみていなかった。たしかにおっしゃられた日中戦争と太平洋戦争の話は、中国を研究していると引っかかってくるところでして、戦前から有名な研究者で竹内好という人物がいますけれども、彼は日中戦争に対しては批判的な部分もあったんですけども、太平洋戦争が起きた時に、それまでの後ろめたい気分が晴れた、という文章を残しています（「大東亜戦争と吾等の決意（宣言）」『中国文学』第80号、1942年1月）。そのため、日中戦争は間違いだったけれどもアメリカと戦ったことは正しいという考えを持っていた人はいたのではないかということがあると思います。

池谷監督

いまアメリカという話でしたけど、これね、残留問題というのは日本政府もまったくわかってるんですよ。それから進駐軍もわかってるんですよ。GHQも。で、2,600人くらいはいいかという話なんですよ。赤の台頭はまずいと。その中で巧妙にやられていたということなんですね。だから余計に認めるわけにはいかないんです。国際法違反だからね。ポツダム宣言違反ですからね。

一ノ瀬

フィリピンにいた小野田さんの太平洋戦争は自衛戦争だったか、というお話でしょうか。戦後の小野田さんは30年近くフィリピンにいて、ご存じの方もいると思いますが、かなり多くの現地の人を殺してしまっています。罪のない現地の人をたくさん殺しているという点では、奥村さんと本質的に同じだと思います。

池谷監督

小野田さんは、たくさん書物を出している中で『たった一人の戦争』というのがあります。僕は、

これはちょっと神経疑うんですよ。小野田さんに命じられて2人部下が残って死んでるんですよ。それをたった一人というのはなぜかなあと僕は思ったけどね。

質問者

監督に伺いたいのですが、最後の場面で奥村さんが小野田さんに突然話しかける場面がありました。あれは初めから本人がそういうつもりであったのでしょうか。

池谷監督

冒頭で言ったように、あの映画は中国残留兵奥村和一が奥村和一をどんどん演じていくということなんです。それは、別にシナリオがあるでもなんでもなくて、やはり自分の役割として使命として持っていたというのがあるんです。普段の奥村さんなら絶対小野田さんのところに会いにはいかない。行くわけない。で、もうそのころは僕との間はアイコンタクトみたいなもので、僕がじろっとにらむと奥村さんが、みたいな感じで。ただ、僕らはね、あの日小野田さんが来て演説するって知らなかったんですよ。俺、こういうことって割と無頓着で、不勉強だから。でも、もう小野田さんは外せないですよ。奥村さんとのシーンはね。で、あれ、午後は、もし小野田さんと（の接触）が空振りだったら、午後は石原慎太郎だった。ちょっと役不足だもんね、石原慎太郎だとね。やっぱりあそこは小野田さんだよ。

もう一つ言うと、あのシーン、ものすごく強いでしょ。奥村さんがフレームインしてくるからね。あれ、普通は、カメラは奥村さんの後ろをついていくんですよ。そしたら絶対外さないから。そこはカメラマンと奥村さんがものすごい信頼関係で結ばれているということなんです。つまり小野田さんがみんなに囲まれたサインをしているところに、必ず奥村和一は入ってくるという風にカメラマンはわかっているわけですよ。奥村さんはもう心臓バクバクだったと思いますよ。

ちなみに言うと、坦白書を読ませられる金子さんという人もすごかったでしょ。あれは逆に俺の方が心臓止まりそうだった。金子さんの心臓止まっちゃったらどうしようと。で、もう一人の村山さん、読まれなかったでしょ。震えるだけで。だけど奥村さんは自分はそのようなのを通過しちゃってるから、ほい、これ読んでみな、みたいな感じで渡すんだよね。だけどやっぱり、奥村さんがどんどん役者になっていくその過程を撮ったんですよ。

だからラストのシーンで奥村さんが「私の映画を撮ってます」と2回言ったでしょ。俺、あれを聞いて、この映画の撮影終えられると思ったんです。ようやく「私の映画」言ってくれたと。だから最後8月15日終戦六十年目の、この日に何が起きようが起きまいが、もう映画の撮影は終了すると。それで靖国神社へ行ったら、小野田さんが撮れた。狂ってなきや、80歳の爺さんのヌード撮らんですよ。普通。でも、あのシーンで奥村さんは閻錫山の参謀に、私はあなたより若いんですけど言ってたね。それからもう一つ、奥村さんの体には砲弾のかけらが残っているわけですよ。つまり奥村さんは戦争を宿した肉体を持っているわけです。だからあの裸には映画的にはそうした思いを込めました。カメラマンって優しいよね。俺はチンチン撮れて言ったんだけどね。やっぱりああゆうふう美しく撮ってくれるというかね。意外といい体だったね。もっとガリガリの感じか

と思っていたのに。ほんと良い身体だと思いましたね。

でもね、俺、凄く乱暴なこと言っているけどね、奥村さんと俺は言葉悪いけど、共犯関係で結ばれていたんですよ。『蟻の兵隊』って一番撮りたかったのは奥村和一だからね。この監督少し頭おかしいけど、くらいついていこうって思ったんじゃないですか。そうすれば「山西省残留兵問題」は残るって。残ったということに対して、奥村さん、他の残留兵の方々もそうだけど、公開した時には8月15日に残留兵5人並べたんですよ。すごい迫力だったよ。説得力というか。この映画はね、100年残るからね。最初、一切知らないでお手伝いもできなかったけど。でもこういう映画が残せたことで、少しだけ罪滅ぼしができたかなって。

死ぬまで付き合ったよ。奥村さん（亡くなる）前の年に、奥村さん俺の事軍曹だと思っているので、なんかあると必ず俺が呼び出し食らうんですよ。その時は入院中で放射線治療受けてたの。奥村さん、晩年は癌との闘いなんですね。だけでも栄養剤にウイスキー入れたりして。それでね、退院してすぐ呼ばれて、5泊6日の路程表っていうの渡されるの。で、自分も長くないと思ったんじゃない。だから戦友の墓参りとか、気になっていることやっておこうって思うんですよ。でも奥村さん、俺に付き合ってくれとは言わないんですよ。そういうことは言わない。でも俺には全てを伝えておいてくれとは言っているの、何が起きているのか、それで、それ見せられてね。「わかったわかった、俺付き合うから、ただし今回は退院したばかりだから、1泊2日だよ」って。「それ以上は無理だから」って。一日で岩手の一戸まで行って。戦友のお墓参りと遺族訪ねて。帰りに仙台寄って。その頃はもう金子さん亡くなっていたから。金子さんの遺族と会って、その日だけで奥村さん一升飲んだ。往きの新幹線で3合飲んで、岩手で2合飲んで、仙台で3合飲んで、もうこれで終わりだよって、部屋に送り届けたのホテルの。そこからね、少し抜け出してね、コンビニのワンカップ3本買ったっていうからね。そのくらい飲むのが好き、でも全然乱れないの。

もう一つ面白い話すると、奥村さん、興信所、探偵やっていたことがあるの。だからね、調べ事、得意なんだよね。業界紙の記者もやったのよね。一升瓶横に置いて書いたっていうからね。よっぽど飲める人だよ。ほんとに楽しかったですよ。奥村さんと酒飲むの。余計な事でした。若い人。

質問者

今日は来ていただいてありがとうございます。僕が映画で印象に残った点なんですけど、二度ほど、一つ目は中国のテレビ局の取材を受けた場面と、もう一つ奥村さんは強姦したのかと聞かれた場面で、誰がしたとかしてないとかではなくて、軍隊全体としての問題なんだったっておっしゃった場面があったんですけど、いいように解釈すれば、した人の罪も被るべきだって捉えられるかなって思ったんですけど、これはちょっと、責任の所在を曖昧にしているところがあるかなって、思ったんですけど。

池谷監督

奥村さんはね。あそこのロジック理解するのは難しいところなんだけどね。奥村さんは責任の所在を曖昧にしないために、軍というところはどういう構造で動いているのかっていうことを、もっ

と知らなきゃいけないって言っているところだよ。要は、強姦とか普通に行われている組織になぜ日本軍がなっているのかっていうことをもっとしっかりと検証しなければならないということだと思っはるんですよ。ただ、個人の責任逃れのようにも取れるんだよ。公開したころ、いろんなふうにも言われましたよね。個人の戦争責任はないのかと。確かに個人にも戦争責任ってあるよね。ただ日本は異常な組織だったから、そこはね。

質問者

当時の人は有無も言わず戦争に行くしかなかったということだと思うのですが、知らない僕たちはそこがあまり理解できないことなんだと。

池谷監督

そうだね。たとえば捕虜になる前に死ねっていうこととか、日本には戦人訓というのがあったんですよ、そこでは捕虜になるなら死ねと、自決しろと。当時は人間として扱わないわけですよ。兵士を。だからそういう部分があったんじゃないかな。

あと、あの、山西テレビね。いいこと気付いたね。あのね、実はね、僕は『蟻の兵隊』を、中国の CCTV 中央テレビと一緒に、組んでやることを考えたの。なぜかっていうと僕ら中央の档案馆、公文書館に入ることができないの。だから CCTV と組むことを考えたんですよ。それでまず、私一人でロケハンしてきたことをね、中国の外交部が俺の行動見て全部リークしたの、地元のメディアにね。僕が取材とかいろいろなところに行くでしょ、例えば大同の炭鉱って大虐殺のあったところだから、そういうところ行けば当然ね、焦るよね。するとフラッシュの行列、翌日の中国の新聞に、謝罪の映画って書かれた。ロケハンだからね、これ。これで奥村さん来たらとんでもないことになるって、それで CCTV と組むの諦めて、中国の取材を全部断わっていたんです。

でも、事情があって山西テレビ地元のテレビだけは断れなかったの。山西テレビは奥村さんに何人殺したって言わせたがるんですよ。しかも、それが、僕らがロケから帰ってきて、夜中の 11 時ぐらいから始まって、1 時間たっても 1 時間半たっても終わらないわけよ。その苛立ちとか説明せずに入れてるわけ。つまり戦争っていうのは感情論になるっていうことなんですよ。そうなれば俺は奥村さんを守ろうとするからね。でも奥村さんは大したもんだと思って、奥村さんは一人冷静に答えてるね、そこで。周り僕らスタッフは興奮してるって状況なの、実はそういう裏があったんですよ。中国の新聞に謝罪の映画って書かれているんですよ。翌日も日本の 2 ちゃんねるに売国奴監督って書かれてたからね、俺。駅のホームでは気をつけてくださいとかね。まあ、こういう映画やれば必ずそうなりますよね。でもね、中国のメディアも言っちゃ悪いけど酷いよね。でもそういうふうには伝えたかったんだろうね、蟻の兵隊を謝罪の映画だと。

質問者

最後に一点だけ、これ全然関係ない事なんですけど、奥村さんがお酒が好きなのは、単純に好きなのかそれともトラウマから逃れるためなのか。というところが少し気になります。

池谷監督

それはね、好きだから。山西省の旅ってね、山西省の中だけで3,300キロ移動したんですよ、三週間で。実は奥村さん、50代の時に胃がんやっているんですよ。胃を全摘したの。胃がないの、あの人。ごはん食べれない人なのよ。だけど酒好きなの。困ったなーって思ったの。旅立つ前に一番不安だったんですよ。旅って言うのは食べないともたないから。特に奥村さんは体力的なこともあるけど、精神的軋轢もものすごくあるんですよ。この旅、殺人現場行くんだからね。どうしようかって思ったんだよ。奥村さんね、一生懸命食べたんだわ、健気ってくらいだったよ。それは自分が倒れたら奥村和一がダメになるだけじゃなくて、この作品がダメになるって分かっていたからだよ。ただ、酒飲ませないってわけにはいかないから、中国に杏の種のジュースってあるじゃない。奥村さん普段日本で、焼酎の牛乳割ってというの飲んでるの。焼酎辞めて牛乳だけ飲めばいいっていうけど、そうすると腹壊すんだって。酒が入っていると大丈夫らしいんだよね。それでね、杏の種のジュースがミルクに近いから、パイジュウだよ、中国の56度ある酒に、そのまま飲まずわけにはいかないから、ココナツミルクのジュースで割ってね。飲ませてたんだけどね。奥村さん言ってたもんね。酒は配給制でしたからね。それだけ好きなんだと思うよ。酒が。

ちなみにね、もう一つ、奥村さんね、故郷を追われるように後にした。ただね、『蟻の兵隊』を公開した半年後ぐらいだったかな。中条って町、今は胎内市の教育委員会が主催して、上映会をやったんです。ポスター150枚購入してったの。で、僕と奥村さん駅に着いた駅の大通り、200メートルぐらいにポスター貼ってあった、その日800人入ったんですよ。ふるさとってというのはありがたいものですね。奥村さんをそうやって迎えたの。でもね、奥村さんは家出ちゃった人で、長男なんだけど、中条の墓には入れない人ですよ。あの最後の印象があったのか、妹さんに俺が死んだら家の墓に入れてくれって。いまはそう、中条で眠っているんですよ。はい、そういう話。

質問者

ありがとうございました。一ノ瀬先生のレジュメに中国が最も多い5,600人、残留日本兵ですね。国民党が2,600人ということで、先ほど今回のメインになることだったと思うんですけど。共産党が3,000人となってまして、この3,000人に方々はその後どうなったんでしょうか？分かったら教えていただきたいんですけど。

池谷監督

野坂（参三）さんなんか延安にいたってというのは有名な話ですけどね。当然、共産党側に協力する形になった方々がいたってことなんです。ひょっとすると、残留部隊が戦った相手側に日本兵がいた可能性もあるわけ。中国の内戦を日本人同士が戦っているってことになりますね。その事実を僕は聞いたことはないけど、可能性としてはないことも無い。その方々の帰国後は、僕はあまり知らないの、一ノ瀬先生。

一ノ瀬

そういう方がいらっしまったこと自体はわかるのですが、その後どうなったかはわかりません。

小野寺

池谷監督も言われたのですが、流用人員という形で、技術者ですとか、医療関係者といった方が残っていて、そうした方が、中華人民共和国ができて数年経って帰ってきた。いろんな方がいて、奥村さんのように中国共産党のスパイ扱いされた人もいれば、日常生活で困っていた方もいたと思います。ただ軍人でどういう事があったのかわかりません。ただ中国の歴史関係の資料なんかでは中国の東北部で流用された人がいたことは間違いないだろうと思います。

池谷監督

あとね、奥村さんたち残留兵の中にはね、ビルマの堅琴の水島上等兵になっちゃった人もいますよ。中国の五台山なんかに籠って、そこから全国をお坊さんとして廻っているって。昭和40年代か50年代ぐらいにそんな人がいるって、捜索に行ったこともあるんですけど、残留兵たちが。だから、そう、人生そのもので、痛切な記憶だったでしょうね。戦後、また戦争をやらされたってことでね。そうゆうなんて言うか、無常みたいなもの感じて坊さんになったんでしょうね、きっと。

締めか、来年終戦75周年なんですよ。『蟻の兵隊』2006年に公開するときに僕の宣伝プロデューサーっていうか、宣伝チームがあるんですけど、『蟻の兵隊』のね。こいつ面白いやつで、インド映画の『踊るマハラジャ』大ヒットさせた奴で、彼が『蟻の兵隊』宣伝してるのね。

彼が最初、この映画は宣伝する映画じゃないって言ったのね。断るって言ってきたの、でも断るけど会いたいって言ってきたの。その時に便箋3枚にびっしりとプランが書いてあってね、この蟻の兵隊は奥村さんとあんたでフィルムを担いで全国廻れって。終戦75周年、来年ね、俺やってみようかなって思って。奥村さんはいないんだけど。奥村さんと一緒にね、全国、北は北海道から沖縄まで『蟻の兵隊』持ってね、ツアーやるのもいいなあって思ってます。

ひょっとするとまたちょっと変わった牧さんが、ここでやってくれるかもしれないから。やっぱりね、つくった映画の命を殺さないでいつまでも見せていくっていうのが僕の使命だからね。これからも『蟻の兵隊』をどんどんどん上映していきたいと思っています。また僕の他の作品も機会があったら見てください。どうもありがとうございます。

(文字起こし：千葉周)